

神に呼び出される

[聖書] 出エジプト記3章1～15節

モーセは、しゅうとでありミディアン人の祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒野の奥へ追って行き、神の山ホレブにきた。そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがひありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名／これこそ、世々にわたしの呼び名。

[序]川越教会の現状

皆さん、お早うございます。上尾教会の皆さん、新年明けましておめでとうでございます。今日は教会交流ということで、川越教会の半分が上尾教会に参りました。皆さんがたから色々学びたいと願っています。秋山先生ご一家とは室蘭教会時代に、親しい北海道家族のお交わりをもち、上尾に送り出しました。また大村ご夫妻とは私たちが若かりし日に、目白ヶ丘教会で一緒に教会生活を送りしました。

この新会堂に移る前の、路地を入った小さな土地一杯に建てられた二階家の建物で、下が礼拝室、二階が牧師住居、どちらも満員で子供たちがにぎやかに騒いでいた頃のことを、懐かしく思い出されます。本当によくここまで成長してこられましたね。そのスピリットを川越教会も学ばなければと思います。宜しくお願いします。

さて川越教会は40年前に浦和教会から小久保副牧師が派遣されて伝道開始。今日お伺いしているI姉も初期からのメンバーです。13年後の1985年6月に会員29人で教会組織をしました。ひところは50人を超える群れに成長しましたが、その後衰退して、礼拝が10人を割ってしまいました。火事で会堂が消失し、新しい会堂を2000年に建てましたが、その建築費の借金も未だ760万円ほど残っています。もう一度50人の群れになり、牧師家族を支えながら、積極的な伝道を進めるようになりたい。そのために先ず礼拝30

人・祈祷会10人を実現させようと励まし合っています。

今日は礼拝前の教会学校成人科シニアのクラスに出席させていただきました。やはり分級はいいですね。教会に来て、だまって礼拝を守り、挨拶程度で帰っていくのではつまりません。単なるおしゃべりではなく、聖書のみ言葉を学んで分かち合い、祈り合う信仰の交わりがあって、礼拝の恵みが豊かになるのです。

川越は成人科の分級をやっと月に1～2回開く程度。子供が居ないので小学科ありません。本当に淋しいです。子供のいない教会には明日がありません。じじ・ばばが死んだら終いです。赤ん坊の泣き声の響く礼拝、子供たちが騒いでいる教会を何とかして取り戻したいです。幼児科、小学科の再開、成人科も毎週守れるようになりたいです。お祈り下さい。

私は今、少し戸惑いながら講壇に立っています。川越では教会学校の学びがありませんから、聖書教育のカリキュラムに沿って、祈祷会の聖書の学びと礼拝の説教を行い、信仰の養いを心がけています。そこで今朝も川越方式で、教案に従って説教を準備しました。ところがここに来てみたら、成人科は創世記なのですね。

今日は17章で、アブラムがアブラハムに名前を変える所でした。聖書教育は、出エジプト記で、神さまが、アブラハムたちにはお示しにならなかったご自分の新しい名を、モーセにお示しになっておられる所です。なるべく両方を関連させながら、上尾教会でのメッセージにしたいと心に決めました。

[1] 私たちを救おうと心を砕く神さま

先日、新聞の「めでたきお正月」というコラムに、こんな一文が載っていました。「昨年、地元の神社に初詣でへ。さい銭を入れて、鐘を鳴らそうと勢いよく綱を振ったところ、先端の鐘がカーンと音をたてて落下。そのあと見事に真っ二つに割れた。あまりに恥ずかしく、お参りもそこそこに帰ってきた。楽天家の主人は『新年早々の厄落とし』と喜んでいたが、私はその晩から風邪をひいて寝込んでしまった。ばちがあたったと思うと怖くて、以来その神社には一度も行っていない。」

川越は江戸よりもはるかに古い町で、自らを小江戸と言っています。川越大師や成田不動の分院はじめ、古いお寺が多く、参詣する人また観光客でにぎわっています。お正月やお祭りに参詣し、さい銭を上げてご利益を祈願し、厄除けの品物やお札を買ってきて家に飾り、家内安全・無病息災・商売繁盛を願いつつ一年を過す。これが川越に長く暮している人たちの習俗です。私たちの信仰生活とは、質が違いますね。

一方私たちが信じている聖書の神さまは、もっと積極的に私たち人間に関わり、心を砕いて、私たちを救いに導いて下さるお方です。創世記17章では、神さまがアブラハムに現れて、「私は全能の神である。あなたはもはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするから」と語りかけて下さっています。

名前を変えるとは、新しい人生を歩み出すことを意味します。その時アブラムは99歳でした。神さまは99歳の老人にも、なお新しい人生を送らせようとして下さるお方なのです。80歳になった、90歳になっ

た。もう人生終わったなどと言ってはならないのですね。幾歳になっても、なお新しい可能性を神さまは用意して、私たちを呼び出して下さるのです。

日本には、「さわらぬ神に祟りなし」或いは「近寄る神に罰当たる」ということわざがあります。神さまになれなれしく近づいて、うっかり失礼なことをしてしまったら、罰があたって、祟られる。なるべく距離を置いてお付き合いをした方が無難だということです。ですから 正月とお祭り位の参詣でご利益をお願いする信心に留まっている人が多いのでしょうか。何と侘しい神さまと私たちとの関係でしょうか。

出エジプト記に出てくる神さまは次のようなお方です。創世記に記されているアブラハム、イサク、ヤコブと続く族長の歴史。その三代目のヤコブは晩年に、世界的飢饉のため エジプトに逃れ、移住しました。それから約400年後、70人だったイスラエル人が成人男子だけでも60万人、女・子供を合わせれば150万を超える大勢力になっていました。東の国境に近いゴシェンの地方にこれほどの異民族イスラエルが暮していることは、国防上きわめて危険だとエジプト国王は考えるようになりました。

そこで過酷な労働を加えて彼らの力を弱めようとしたのですが、思ったようには効果が現れません。遂に国王は「生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め」という命令を出しました。親にとって、またイスラエル民族にとって絶望的な暗黒時代を迎えたわけです。それを見て神さまは、この民を救う大きな計画をお立てになりました。

まず、生まれた一人の男の子に目を留め、その子を川からエジプトの王女に引き上げさせ、彼女に自分の子供として、育てさせたのです。王女は彼を水の中から引き上げた者モーセと名付け、世界の文明国エジプトの最高の教育と王宮の帝王学を授けました。しかしモーセは成長するにつれて、イスラエル人としての自覚を深めるようになりました。そして40歳の時、イスラエル人を虐待するエジプト人を殺してしまいます。国王の知るところとなり、命が危なくなると、彼は王宮から荒野をはるかに超えたシナイ半島の彼方、ミディアンに落ちのびました。そしてその地の祭司エトロの家身を寄せ、羊飼いにになりました。

羊飼生活約40年、モーセが80歳になった時、彼を殺そうとしたエジプト王が死に、代が変わりました。いよいよイスラエル人がエジプトを脱出する時節の到来です。神さまがモーセを呼び出す時が来たのです。神さまは羊を飼っているモーセを、ホレブの山に導き、柴が燃えているのに燃え尽きない不思議な光景を示して、近づいた彼に、神さまの考えておられる救いの計画と、モーセの任務を語り聞かせられたのでした。

このように私たちの信じる神さまとは、私たちの苦しい困難な状況をご覧になると、心を砕いて最善の救いを考えて下さるお方です。そして私たちが気付かないところで着々と必要な手を打ち、導いて下さるお方なのです。

[2] 神さまの新しい呼び名

神さまはモーセにこうお語りになりました。「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々を エジプトから連れ出すのだ」。ところがモーセは、神さまの呼び出しを断りました。再三再四、拒み逆らったのでした。

どうしてでしょうか。皆さん、その時のモーセの心情に思いを寄せてみましょう。彼は40歳まで当時の世界最大の国、また文明国エジプトの王宮で、王女の子として華やかな生活を送り、最高の学問と帝王学を学びました。前途洋々でした。ところが同胞イスラエルを救おうとの血気にはやって、エジプト人を殺してしまいました。

すると、喜ばれるどころか助けたはずの同胞から裏切られ、国王の怒りに触れ、遠く荒野の果てまで逃げなければならなくなったのです。一切を失ってしまいました。深い挫折感に打ちのめされて、しがない羊飼暮らしを40年も送ってきたのです。このまま世の片隅で一生を終えるのだと、諦め切っていたのではないのでしょうか。3章4章に記された神さまとモーセのやり取りを読んでいきますと、若い時に手にしていた何もかもを失い、志をも失って、万事に否定的で無気力になってしまったモーセの心情が伝わってきます。

しかも神さまが彼にさせようとしている任務とは、150万人を超える奴隷とその家族をエジプトから連れ出すという途方も無いことなのです。大勢の奴隷を失うことは、国家的大損失です。エジプト王と交渉しろといわれても、おいそれと承諾されるはずがありません。

その上、王との交渉の前にイスラエルの人々の所に行き、自分が神から派遣されていることを信用してもらわなければなりません。モーセはイスラエル人の子とはいえ、エジプト人の王宮で育ったのですから、同胞にとっては全く関係のないよそ者でしかないのです。「イスラエルをエジプトから連れ出せとお前に命じた神とは、一体何か」と問い詰められるのも当然でしょう。神さまのご命令でも、おいそれと引き受けることなど出来ません。

これに対する神さまの答えは、「わたしはある。わたしはあるという者だ」でした。皆さん。このお言葉をどう読み取りますか。何か禅問答みたいです。ですから昔から様々な解釈がなされてきました。でも私にはどれもストンと心に響いてこないのです。一生懸命考えました。私なりの解釈をご説明いたしましょう。

神さまは、「わたしはある。わたしはあるという者だ」という14節のお言葉に続けて、15節で「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が、私をあなたたちのもとに遣わされたのだと言いなさい」とモーセにお命じになっています。「私はあるという方」を「アブラハム、イサク、ヤコブたち先祖の神である主」と言い換えておられるのです。そして「これこそ、とこしえに私の呼び名、これこそ、世々にわたしの呼び名」とおっしゃいました。

6章2～3節をご覧ください。「神はモーセに仰せになった。『わたしは主である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった。』」。確かに今日の成人科で学んだ創世記17章1節で神さまは、「私は全能の神である」と、アブラハムにお語りになっています。しかし「わたしは主である」と名乗って語るのは、モーセよ、お前が初めてなのだよとおっしゃったのでした。

また33、34章にも「わたしはあなたの前に主という名を宣言する」と繰り返されています。すなわち、神の名の最も完全な定義付けは、主なる神だというのが、出エジプト記の主張なのです。ですからこの関連性からして、3章の14節の「わたしはあるというお方」とは、主というあり方で私たちに関わってくださる神という

ことになるでしょう。

主——これは主権と支配と権威をあらわす言葉です。すると、この主の前に立つモーセは僕です。へりくだって絶対的に服従する僕です。全幅の信頼をよせて、我が身の一切を委ね、御心を行なう僕なのです。神さまは絶望的な状況にあるイスラエルの民を、エジプトから解放する大きな計画をお立てになりました。「モーセよ、私の僕として立ち上がり、私の命じることを行なう者になりなさい。民よ、私の命令に服従しなさい。私は主である」とおっしゃったのでした。

【結】 神の呼び出しに応える

神さまはアブラハムに新しい名前を与えました。そして99歳にして新しい人生を歩み出させました。神さまはモーセの前に、ご自分の新しい呼び名をお示しになりました。新しい名で神さまに呼びかける——これはモーセの神さまに対する信仰が新しくされたことを意味します。モーセの信仰の開眼です。こうして荒野で羊飼いとして果てようとしていたモーセが、信仰を新たにして、神さまの救いのみ業の舞台に呼び出されたのでした。

世界は百年に一度といわれる経済不況の嵐に襲われていると言われていています。心が暗く沈みこんでしまうニュースばかりです。でも神さまは、絶望的な暗黒にあるイスラエルの民を救い出す大きな計画を立て、その大事業を成し遂げていく人物モーセを、80年かけて教育訓練して、お育てになりました。そのモーセが深い挫折の淵に沈み込んでしまっても、荒野の果てから呼び戻して、大勢の人々を奴隷の境遇から解放する救いのみ業を、成し遂げて下さったのでした。その神さまが今日の深刻な経済危機のさなかでも、私たちの神さまとして生きて働いて下さっているのです。

神さまは私たちが一人も滅びることなく、豊かな命の祝福にあずからせようと、心を砕き、導いてくださっておられるお方です。神社の鐘を落として割ってしまった位で、怖ろしい祟りをもたらすようなお方ではありません。

神さまは世界の主なるお方です。死や滅びの闇をも支配しておられる主なるお方です。十字架をご覧下さい。私たちの罪の一切をご自分が引き受けて、ご自分の命と引換えに償い、私たちに命を与えてくださった愛の神さまです。

新約聖書の中にこういう言葉があります。「神はキリストを高く上げて、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。——『全ての舌がイエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をほめたたえるのです」(フィリピ2:9~11) 十字架を通して神の本質を啓示されたキリストに与えられた主という名は、あらゆる名にまさる名だと言うのです。

神さまを主と呼ぶことは、何よりも神さまに相応しい呼び方です。ですから私たちは、神さまの僕なのです。私たちが、全幅の信頼を寄せて我が身を委ね、従っていく僕となる時、神さまの救いのみ業は、私たちを通して周りの方々にも及んでいくのです。

神さまは、今日この暗い時代の中でも、生きて働いておられます。私たちを呼び出しておられます。その

呼び出しに応答して、救いのみ業に用いられる者になろうではありませんか。

完